

宝菩提院願徳寺蔵

「国宝 菩薩半跏像（伝如意輪観音）」と相似する白描図像について（下）

— 大安寺東塔壁画と大安寺の入唐僧戒明の役割 —

山 本 泰 一

はじめに

一 宝菩提院の概要と本像の尊名

（一） 宝菩提院の沿革

（二） 近世以前の史料にみられる本像についての記録

（三） 近代以降の本像の尊名についての言説

二 「諸観音図像」にみられる白描図像「聖観音像」

（一） 「諸観音図像」の概要

（二） 「諸観音図像」の白描図像「聖観音像」

三 本像と白描図像「聖観音像」の像容の相似

（以上、前輯）

前輯の梗概

四 大安寺東塔と壁画

（一） 大安寺の沿革と早良親王の入寺

（二） 東西七重塔の建立

（三） 東塔壁画の画題

五 大安寺僧戒明の入唐と金陵見聞

（一） 戒明の入唐

（二） 戒明の金陵見聞

六 大安寺東塔壁画の主題

七 本像の造像と戒明の役割

おわりに

前輯の梗概

宝菩提院願徳寺蔵「国宝 菩薩半跏像（伝 如意輪観音）」（以下、「本像」と表記する）の尊名について、従来唱えられてきた、如意輪観音菩薩・月光菩薩・右脇侍菩薩・普賢菩薩・虚空蔵菩薩の五説を検討し、いずれも確定させるには決め手に欠けているとせざるを得ないとした。

奈良国立博物館蔵「諸観音図像」の白描図像をポストン美術館蔵「諸尊図像集」により「聖観音像」と確定し、承暦二年（一〇七八）頃に、図像作

者である定深はこの像容を聖観音として認識していたとした。この画像を以下、「白描聖観音像」と表記する。

白描聖観音像は、奈良・大安寺東塔の丑寅（北東）角の四天柱に、絵師巨勢金岡の様式で描かれていた。図様は『法華経普門品』に観音が三十三の応現身像になり、衆生を救済するために現れると説かれることに基づいている。その像容は、『不空罽索神変真言经』第九に説かれる「广大解脱曼拏羅」中の内院の西面の阿弥陀如来の右脇侍である「観自在菩薩」に基づくと思われる。左手は蓮華を持ち、右手は掌を仰向きにして腿に置き、右足を垂下させて半跏趺坐している。

白描聖観音像と本像の像容、すなわち姿勢や着衣などを詳細に検討したところ、相似していると判断した。ことに、天衣が複雑にうねり反転するさまは酷似している。また、額上の花環から髪束を出すこと、条帛が天衣を潜り先端が渦をまく形式は他に例がなく、両者が共通する画像で製作されたことを証している。本像を聖観音像と称するのが妥当である。

本像の坐勢を半跏像とするのは、片足を腿に載せていないので、誤用とする見解があり、踏下像・遊戲坐像などと称する例がある。しかし、白描聖観音像の註記に「半跏趺坐」と記されるように、平安時代中期頃は半跏とみられていた。経軌にも半跏にしていた片足を垂下しても「半跏趺坐」との記述がある。明治時代以来、慣用的に用いられてきた半跏像と称しても妥当であろう⁽¹³⁾。

四 大安寺東塔と壁画

白描聖観音像の作者である定深は、註記した情報をどのようにして得た

のであろうか。画像を集成する際に、他の画像集などの引用もあるだろうが、前述したように（前輯、註（85））、定深は興福寺僧であったので、実際に大安寺東塔の内部を見たことも考えられる。画像を製作した承暦二年（一〇七八）は、興福寺別当の公範が大安寺別当も兼ねていたからである。大安寺は長暦三年（一〇三九）に興福寺僧円縁が大安寺別当になって以来、興福寺の支配が続いており、堂舎の復興も行われていたので、調査することも容易であったと想像されている⁽¹⁴⁾。作者の巨勢金岡についても、大安寺の伝承に拠った可能性がある。

また、定深がその像容を数多ある観音像の中から密教經典である『不空罽索神変真言经』第九の「广大解脱曼拏羅品第十二」に説かれる「广大解脱曼拏羅」中の内院の西面の阿弥陀如来の右脇侍である「観自在菩薩」（前輯、註（91））と断定したのは、研究の成果なのか、画像集の引用なのかは不明であるが、大安寺に伝承があったことも考えられる。

よって、大安寺と東塔の造営状況および壁画の画題の選定状況について先ず考察したい。

（一）大安寺の沿革と早良親王の入寺

大安寺は、舒明天皇十一年（六三九）に舒明天皇が造営した日本最初の天皇御願の官寺・百済大寺にはじまる。天平十九年（七四七）の『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下、『資財帳』と表記する）の縁起によると、百済大寺は病床の聖徳太子より田村皇子（舒明天皇）に寺院建立を遺命として託された太子ゆかりの寺とされる。宮の変遷と共に高市大寺・大官大寺と所在や寺名を変え、和銅三年（七一〇）の平城京遷都に従い、靈龜二年（七二六）に、十五町もの広さの左京六条四坊の地へ移転した官寺の筆頭寺院である⁽¹⁵⁾。

大安寺の造営は、前身の大官大寺に倣った伽藍計画で開始されたが、天平元年に聖武天皇の命により留学僧であった道慈が関わり、当初の計画を変更して、唐の寺院に倣って伽藍を改造した。『資財帳』によると、伽藍の特徴である長大な僧坊には八百八十七人の僧が止住していた。『華嚴經』を東大寺で講義した新羅学生審祥や東大寺大仏開眼の導師を務めたインド僧の菩提僊那・唐僧の道璿・林邑僧の仏哲などの僧がよく知られている。こうした渡来僧や留学僧などの最新知識をもとに、三論宗の学派の拠点として、律や華嚴および密教など他学派も採り入れ研究し発信する、国際的な学問寺院であった。⁽¹⁷⁾

白壁王(天智天皇皇子)の子・早良は出家して修行していた東大寺羅索院より大安寺東院に、神護景雲二年(七六八)か七六九に移る。⁽¹⁸⁾ 白壁王は東大寺竣工後、低迷していた大安寺の地位回復を目論んで、我が子を復興役に起用したのであろう。

宝亀元年(七七〇)に白壁王が即位して光仁天皇となると、出家したまま早良は親王号を授けられ、「親王禪師」と呼ばれた。さらに宝亀年間(七七〇～七八〇)に東大寺運営にも関与し、東大寺および造東大寺司の最高指導者的な立場にあったと指摘されている。⁽¹⁹⁾

早良親王は二十一歳で入寺してから立太子までの十年余、大安寺東院に止住し、若年ながら東大寺および大安寺の運営を統括し、造営や造像に力を揮った。大安寺僧の慶俊・戒明・行表や東大寺僧の良弁・実忠などの他に、寺外の淡海三船・石上宅嗣・鑑真弟子の思託・法進、さらには藤原刷雄・石川恒守などと交流し、理想的な寺作りや、天皇家だけでなく、庶民の救済を含めた体制を構想していた。⁽²⁰⁾

(二) 東西七重塔の建立

大安寺伽藍の特徴に、東西二つの塔(七重塔)が、主要伽藍の外にそれと同じ広さの別院(四坊塔院)として造営されていることがある。⁽²¹⁾ 天平十六年に道慈が歿すると、造営は停滞したようで、『資財帳』には寺地と塔に属する物資(銭・巾・古帳長布・交易繩・真綿など)が記載されるが、七重両塔の記載はないため、天平十九年には塔は完成していなかったとみられる。天平神護二年(七六六)十二月に「己酉(二十八日) 震大安寺東塔」とあり、東塔の存在が確認される。翌年、三月九日に称徳天皇が大安寺に行幸し、造寺大工輕間連鳥麿に叙位しており、これを塔院が竣工したためとする見解がある。⁽²²⁾ しかし、行幸は大安寺単独ではなく、二月の東大寺を筆頭に六大寺を巡幸する一連の行事であり、順序は五番目であった。⁽²³⁾ 大工への叙位だけで、竣工に関する記事がない。したがって、塔院の竣工とまでは確定できないと思考する。

宝亀六年に、早良親王が淡海三船に撰述を依頼した『大安寺碑文』⁽²⁴⁾ には、親王が荒廃している伽藍の現状に心を痛め、先祖を惟つて修復すると共に、仏殿や仏像を新造したとある。しかし、完成していたら当然触れてしかるべき塔の壁画に関する記事はなく、この時点でも完成には至らなかったと想像される。

大安寺址の発掘調査⁽²⁵⁾ によると、奈良時代中期製作との見解がある「大安寺式軒瓦」は、主に僧房跡のほか、東大寺大仏殿の周辺からも出土している。東大寺出土瓦は、大仏殿の回廊用に天平勝宝八・九年(七五六・七五七)に大安寺に依頼して造られたと推定されている。東塔出土瓦は大安寺式軒瓦を彫り直した范型で造られており、時期が下るとされ、東塔の建立は奈良時代後期と指摘されている。西塔出土瓦は文様が東塔出土瓦よりさらに

退化しており、奈良時代末頃の製作で、建立は八世紀末～九世紀初頭まで下ると指摘されている。東塔出土瓦の中に、西塔出土瓦が混じるとされ、東塔の完成は、宝亀末年頃とするのが妥当と思われる。塔は、総高七〇米、相輪部分が一九～二〇米、水煙が二～三米で、三間四方で一辺が一二米、基壇が二一米と推定される壮大な七重塔なので、造営に時間がかかったのではなからうか。

その後、天曆三年（九四九）に西塔が被雷し、焼失する。寛仁元年（一〇一七）には主要堂塔を焼失したが、東塔だけは免れた。その東塔も永仁四年（一二九六）に被雷炎上し、その後、再建されずに現在に至る。⁽³⁰⁾

（二） 東塔壁画の画題

大安寺の東西七重塔が早良親王の尽力により宝亀末年頃に完成し、塔内の壁画も塔の完成と同時とするのが、天皇家の推進した事業であれば当然と考えられる。東塔壁画についての同時代の史料はないが、後世の史料が伝えられている。これらは、服部匡延氏により紹介されている。⁽³¹⁾これを参照し、服部氏発表後、関連する事項で研究も進んでいるので、加味して述べることにする。

（1） 白描聖観音像

右像大安寺東塔丑寅角柱、金岡手跡様也、件像者図三十三身所変、不空罽索經第九云觀自在菩薩、左手持蓮花右手仰掌脰上半跏趺坐三云々。

（2） 『七大寺日記』⁽³²⁾ 嘉承元年（一一〇六）

塔基勝鬘夫人ノ出家体木像アリ。柱絵師子等。皆是尤不可思議物也。可見之。

（3） 『七大寺巡礼私記』⁽³³⁾ 大江親通 保延六年（一一四〇）

東塔一基 七重瓦葺。安勝鬘夫人出家体。一比丘立夫人後以左手押夫人頂。右手取利刀安夫人頂上之体不可思議也。斯塔在金堂翼方。其内柱絵師子不可思議也。四面戸脇之左右各有連子。其下小壁内有種々師子形。是奇妙也。又心柱者四方之。其四面之曼荼羅之様。同以不可思議也。口伝云。巨勢金岡筆云々。

（4） 『諸寺縁起集、醍醐寺本』⁽³⁴⁾ 建永二年（一二〇七）

放光菩薩記 大安寺

大安寺塔下北面、西戸脇連子壁板、有梁武帝与志公和尚面談影。其銘曰、梁武帝問志公、朕求成仏、当修行法。志公対曰、解无常、学大理、敬三宝、存終始、莫称我、莫喚你、好事行、惡事止、自取非、与他是、穢底是云々。

以上の史料により、塔中心部から外側方向へ左のような壁画が描かれていたと知られる。

① 心柱四面に曼荼羅之様

塔の心柱を四方から囲む心柱覆板に曼荼羅のような図、すなわち多数の諸尊が整然と配置されて描かれていたと想像される。

② 四天柱の丑寅柱に聖観音像

心柱のまわりに四天柱があり、その丑寅（東北）柱に聖観音像が描かれていた。『法華經普門品』に説かれる観音が衆生の機根に応じて、三十三の様々な姿に変えて衆生を救う際の仏身、すなわち聖観音像である。四天柱に、この聖観音像と三十三軀の観音応現身像が描かれていたと推定される。『法華經』は、奈良時代に「護国の經典として、得度の暗誦經に定められ、また、国分尼寺の法華滅罪經として、国家的性格を持つ經典として広く信仰されていた」とされる。⁽³⁵⁾『法華經普門品』に基づく観音の三十三応現身

のような観音信仰は、若干は流布しており同姿変化(例えば「三十三応現身」・「三十三観音」)の図像化が芽生えていたとされている⁽¹³⁶⁾。大安寺では、神護景雲四年(七七〇)に大安寺僧の修栄により撰述された菩提僊那の行状記『南天竺婆羅門僧正碑并序』に「経云、応以婆羅門身得度者、即現婆羅門身而為說法、是也」とあり、三十三応現身について周知の事柄と知られる。

また、平安時代初期成立の『日本霊異記』下巻 第三十八縁には「乞食者、普門示卅三身也」とあり⁽¹³⁸⁾、奈良時代後期に仏・菩薩の化身という思想が関心を集めていたと指摘されている⁽¹³⁹⁾。四天柱の聖観音像は、こうした観音信仰の理解のなかで描かれたとしていいだろう。

③柱絵に師子等

十二本ある側柱には、師子(獅子)図が描かれていた。『七大寺巡礼私記』に「不可思議也」と記されるが、どのような図様か不明である。

④北面西戸脇連子壁板に梁武帝と宝誌和尚の面談図。銘文がある。

壁面の各面は、扉がある中央部が十四尺、両脇がそれぞれ十三尺あり、両脇の中央には連子窓が付く。この連子壁板八面の内、北面西戸脇に描かれていた。銘文には梁の武帝が宝誌和尚⁽¹⁴⁰⁾に成仏するための修行法について尋ね、これに宝誌和尚が答えた文言が書かれていたので、成仏法を問答する図様であろう。

⑤各面戸脇連子下小壁に種々の師子像

連子窓下の腰羽目板に種々の師子(獅子)図が描かれていた。『七大寺巡礼私記』に「奇妙也」と評される。

限られた一部の断片的な情報だけで、全体像がつかみにくい、初重の壁全体が壁画で彩られていたと想定される。壁画の主題については後述する。

五 大安寺僧戒明の入唐と金陵見聞

(一) 戒明の入唐

大安寺東塔の北面西戸脇連子壁板に、梁武帝と宝誌和尚の面談図が描かれていたが、宝誌和尚像を日本に初めて請来したのが、大安寺僧戒明といわれている⁽¹⁴¹⁾。このことは、唐僧鑑真に従って来日した唐僧思託⁽¹⁴²⁾が、延暦七年(七八八)に撰述した日本最古の集成僧伝である『延暦僧録』第五「智名僧沙門釈戒明伝」(以下、「戒明伝」と表記する)に記されていることにより知られる。思託は鑑真歿後(七六三年)、大安寺に止住し、戒明と親しかつたと推測されている⁽¹⁴³⁾。

戒明の入唐は、『本朝高僧伝』に「宝亀季。奉敕入唐。謁時宗匠。」とあり⁽¹⁴⁴⁾、公式の派遣とされるが、この記事以外に史料は知られない。ちなみに早良親王は「綸旨」により東大寺僧玄覺を、宝亀の遣唐使に「遣唐請益」僧として派遣したとされており⁽¹⁴⁵⁾、戒明の「敕」も同様に親王によるのではないかと推定される。親王は、造営中の大安寺南塔院の堂塔の整備および遷都の準備として、最新の唐仏教や彫像を請来する目的をもって、戒明を派遣したと想定される。

戒明の入唐時期については、宝亀三年と同八年の二説⁽¹⁴⁶⁾がある。

宝亀三年説は、唐大暦七年(宝亀三年)に、聖德太子が著した『法華義疏』と『勝鬘經義疏』を誡明や得清等八人の日本国僧使が、鑑真の弟子である揚州龍興寺の靈祐に献呈したとの史料による⁽¹⁴⁷⁾。

宝亀八年説は、宝亀六年の遣唐使がようやく同八年六月に渡航し、翌九年十月～十一月に帰朝したからである。戒明は入唐前の宝亀七・八年に、

遣唐使船の出航待ちのため、九州太宰府近辺に待機していたとされる。⁽¹⁵²⁾

いずれかの年に限定せず、戒明が両年の入唐のどちらにも参加していた可能性も考慮すべきではなからうか。⁽¹⁵³⁾ いずれにしても、宝亀年間に戒明が入唐したことは間違いない。

（二）戒明の金陵見聞

戒明の入唐後の行動については「戒明伝」のみが伝えており、金陵における見聞記事が主である。戒明の金陵での見聞については「戒明伝」の撰述者である思託の天台僧としての思想的立場が反映されているとの見解があり、見聞した宝誌和尚は天台二祖慧思と問答を行い、傳大士は慧思の傍系の師であるなど天台宗と密接な関係があったとされている。⁽¹⁵⁴⁾ また、大安寺には戒明の師慶俊の所有する慧思の著作があり、天台宗についても知識の蓄積があったように窺われる。⁽¹⁵⁵⁾ 見学先は左の三か所である。

①宝誌和尚像の墓所

「戒明伝」に「復礼拝志公宅、兼請得志公十一面観世音菩薩真身。還聖朝。於大安寺南塔院中堂素影供養。」とある通り、戒明は金陵の宝誌和尚の宅（墓所）である開善寺を訪ね、宝誌和尚像に礼拝し、顔面より十一面観音を現す「志公十一面観世音菩薩真身」を請来し、大安寺南塔院中堂に安置し、供養したと知られる。⁽¹⁵⁶⁾

開善寺には、誌公和尚堂に武帝が宝誌和尚存命中に造らせた彫像があり、他にも梁の画家、張僧繇が描いた壁画があるので、戒明が見た宝誌和尚像は多様であったと知られる。⁽¹⁵⁷⁾ 東塔壁画の梁武帝と宝誌和尚の面談図も、戒明がもたらした図像に拠ったと想定される。

戒明が、新知見である宝誌和尚像を請来した理由は、大安寺の三論宗の

主流学統である道慈―慶俊に繋がっており、この学派が宝誌和尚から相承してきたことにあつたとされる。⁽¹⁵⁸⁾

また、大安寺とその周辺では、道慈が舶載したと伝える『梁高僧伝』の「論」が指針として学ばれ、中国初期仏教史の基礎知識にしていたとの指摘がある。⁽¹⁵⁹⁾ 宝誌和尚は『梁高僧伝』の「神異」の項に収録されており、戒明が学んだ可能性が考えられる。梁の武帝が不可思議な僧である宝誌和尚を擁護し、武帝が「皇帝菩薩」と呼ばれていたことに倣い、天皇御願である大安寺に相応しい象徴的な存在として「志公十一面観世音菩薩真身」を選んだのではないだろうか。宝誌和尚は「時の権力者や教団による正統性の喧伝、庶民との繋ぎの媒介としての役割」を果たしていたとの指摘もある。⁽¹⁶⁰⁾

②瑯琊王家大墓

戒明は、「戒明伝」に「碑碣。石人。石柱。麒麟。師子。行列侍衛道路兩廂。」とあるように、金陵で瑯琊王家大墓を訪ねている。瑯琊王仙人王喬の末裔と自称していた思託の勧めであろう。⁽¹⁶¹⁾

墓を守護する師子（以下、「獅子」と表記する）を見て、獅子は仏陀の墓である塔を守護するのに相応しい図様と考え、東塔壁画に採用したと推定される。獅子は『法華経序品』に「聖主師子」とあるように、仏陀を百獣の王である獅子に喩えており、「獅子吼」「獅子座」「獅子奮迅」なども經典に頻出する。⁽¹⁶²⁾ 法隆寺金堂壁画や法隆寺五重塔南面弥勒浄土などに守護獣として一対で造形されているが、十二本の側柱や八面の連子窓下の腰羽目板を使って、獅子だけを多数描いたのは、日本の作例に全く目新しい。唐代の作例に、沢山の獅子が戯れる白鶴美術館蔵「宝相華唐草文獅子図拓本」がある。これも唐代墓の石槨に刻された図様であり、墓の装飾に用いられ

たことが判明する。

③ 傳大士影

戒明は「戒明伝」に「又得見傳大士影」とあるように、思託の勧めにより金陵で傳大士の影像に拝礼している。

傳大士は中国・南北朝時代の在家の居士である。宝誌和尚とならび、梁の二大士と称された。大藏経閲覧の便をはかつて転輪藏を考案した。後世、経藏に像が置かれ、俗に「笑い仏」といわれる。梁の武帝の帰依を受け、傳大士は武帝に「国主救世菩薩」の称号を奉っている。天台宗では二祖慧思の傍系の師とみなされる。「戒明伝」に「即是慈氏尊之分身也」とあるように弥勒菩薩の化身とされ、神異を現した。

以上のような戒明の金陵における見聞が、東塔の壁画の画題として生かされたのではないかと考えられる。次に検討したい。

六 大安寺東塔壁画の主題

戒明の入唐にあたり指導的な役割を果たした思託は、東塔壁画の製作においても重要な役割を担っていたように窺われる。

思託は師の鑑真と共に、聖徳太子慧思託生説を唱えていた。⁽¹⁶⁴⁾ 慧思信仰をもつ鑑真は、倭国の王子に生まれ変わり、仏法を興隆している慧思の後身を追い求めて来日したとの指摘がある。⁽¹⁶⁵⁾ 思託は『延暦僧録』に初期の聖徳太子伝の源とされている「上宮皇太子菩薩伝」を著しており、この伝で、聖徳太子は慧思が生前持誦していた『法華経』七巻一部を、中国の南岳まで取りに行かせ、注釈して『法華経疏』四巻および『維摩注疏』三巻と『勝鬘経疏』一卷を著したとしている。前述のように、宝亀三年、戒明ら日本

国僧使が、聖徳太子の著作を鑑真弟子の靈祐に献呈している。思託の勧めにより、聖徳太子慧思託生説を承知していた早良親王が仏教先進国の中国に贈ったと思われる。ちなみに、前年は太子の百五十回忌であった。

こうした状況の中で思託の提案により東塔壁画に、慧思の化身である聖徳太子および戒明の金陵での見聞や請来してきた図像類に基づき慧思に關連する事象を主題として描かれた可能性が⁽¹⁶⁶⁾ある。また、太子の信仰の中心であった『法華経』も併せて主題にされていたかと考えられる。

心柱四面の曼荼羅様は、『法華経』に基づく「変相図」と想定される。さらに慧思の師である傳大士も弥勒菩薩の化身であり、東塔壁画の連子窓下の羽目板に描かれていた可能性がある。

以上をまとめると、大安寺の七重東塔の壁画の主題は左の通りである。

史料で知られる東塔壁画と主題

- ① 〈心柱四面〉曼荼羅様(法華経変相図)・『法華経』
- ② 〈四天柱の丑寅柱〉観音菩薩の三十三の応現身像(聖観音像)・『法華経 普門品』

- ③ 〈側柱〉仏陀を守護(獅子図)・『法華経序品』

- ④ 〈連子窓〉慧思と問答した宝誌和尚は十一面観音の化身(宝誌・武帝問答図)・成仏法

- ⑤ 〈連子窓腰羽目板〉仏陀を守護(獅子図)・『法華経序品』

史料は存在しないが、想定される東塔壁画と主題

- ① 〈連子窓〉聖徳太子は慧思の化身(聖徳太子像・慧思像)
- ② 〈連子窓〉慧思の師・傳大士は弥勒菩薩の化身(弥勒菩薩像・傳大士像)

東塔壁画は、早良親王の統括のもと、戒明の唐での見聞や思託らにより、大安寺の創始者と伝えられ、また天台二祖慧思の生まれ変わりとされた聖

徳太子を中心にすえ、化身を主題にして、造営計画が行われたのではないかと考えられる。

化身については大安寺の本尊釈迦如来坐像（亡失）が関係している。本尊は『資財帳』に天智天皇発願の像と記され、もと百済大寺の本尊であった。

天智天皇の造立という由緒故に、希有の靈仏として、天智を皇統の祖と仰ぐ光仁天皇一族は重要視していた。『大安寺碑文』に「仏工権化、無有再来」とあるように、「この像をつくった仏工は権化つまり神仏が姿を変えてこの世に出現したもの」で、仏の化身と喧伝されていた。これに合わせて東塔壁画に化身という仏教の奇瑞を絵画化することにより、仏教の知識がない人々を引き付け、教化するために意図されたと推定される。

また、聖徳太子が観音の化身と信じられていたことが『法華経普門品』に基づいて、四天柱に「聖観音像」が描かれた一因と考えられる。文明十一年（二四七九）の梵鐘の再建勸進状（前輯三―四頁）に、本像を「聖徳太子所作」と記すのも故なきことではない。

さらに塔の初重に木像の「勝鬘夫人出家像」が安置されていた。⁽¹¹⁾在家の女性が出家できることを示しており、太子が『勝鬘経』を講讀したことに基づいていると考えられる。

以上のような塔内の造形により、太子を顕彰して太子の血筋をひく一族であることを強調し、皇統の正統性を世に示す目的があったのであろう。

四天柱の観音像は、本像と同一の図像に基づいて描かれたとしたが、むしろ本像を手本として製作されたのではないかと考えられる。このことについては、次章で述べることにしたい。

七 本像の造像と戒明の役割

概要

本像は、衆生を救おうと蓮台から降りようとする、まさにその一瞬を捉えた姿である。この瞬間の肉体の微妙な筋肉の動きまで、量感豊かな体躯に表されている。ただし唐招提寺木彫群にみられるような誇張はなく、引き締まっている。着衣に覆われた肉体の把握も的確である。眼の二重まぶたや瞳に黒曜石を嵌入した張りのある理智的な表情の面相は異国風である。着衣の鋭さと柔らかさを自在に取り混ぜ、深く掘りくぼめた彫り口やうねるような変幻自在な天衣の構成は、複雑な表現でありながら、破綻していない。

材質

本像の材質は、昭和三十年（一九五五）代前半頃に、樹種鑑定が行われ、日本にしか産しないヒノキと鑑定されて、本邦製作の根拠とされた。⁽¹²⁾ところが、平成十年（一九九八）の精密な樹種鑑定の結果、唐招提寺や大安寺の木彫群が、ヒノキではなくカヤと判定された。⁽¹³⁾これ以降、本像の材質もカヤと表記されることが多いが、科学的な樹種鑑定の報告はみられない。カヤは中国にも産するが、材の産地までは判別できないとのことである。⁽¹⁴⁾ちなみに、樹種鑑定が行われた中国木彫像に、カヤを材質とする報告はみられない。⁽¹⁵⁾科学鑑定が行われるまでは、ヒノキを除く針葉樹材とするのが妥当であろう。

本像の表面を赤紫色に染めて、檀像の最高材である赤梅檀風に仕上げて素地のままとし、頭髮・眉・髭・眼・唇などに彩色を施している。⁽¹⁶⁾カヤの

ような針葉樹材を用いて、木肌を赤く染め、素木のままとするいわゆる代用檀像としては、本像は最も適る彫像の一つになるろう。鈴木喜博氏は、本像を檀木に代わる栢木による檀像とし、等身大や丈六像のような大像製作を可能にした意義があるとされた⁽¹⁷⁾。白檀像に見られる精緻な鏤刻技法による胸飾や臂釧は表さず、別製（おそらく金属製）になるが、全て亡失している。だが背面の石帯や天冠台の留具にその片鱗が窺われる。

先行研究（製作年代・製作地）

本像に関する論考は前輯に七十人の論者による百十二件を数えるとしたが、その多くは展覧会図録・文化財解説書・美術全集・美術史概説書の図版解説であり、また平安初期彫刻史の作例の一つとして記述されるのが大多数である。傑作と評されながら、史料の乏しさからか本像に関する専論は甚だ少ない。また、先行研究をまとめた論考はないので製作年代・製作地に絞り紹介したい。

本像を最初に論考した源豊宗氏は、九世紀前半に製作され、天平の写実性を留めているとされた⁽¹⁸⁾。また、右脇侍像の可能性について述べられた。この後、滝精一氏が檀像のような造形や彫法および二重まぶたや眼球の粒起のさまは、北宋の舶来品とされて以来、国宝解説書も同様で、戦前では北宋の製作説が主流であった。

樹種鑑定でヒノキと認定された頃の文化財保護委員会執筆者（倉田文作氏）は「これほどまでにねばり強く稠密を極める刀技はおのずからわが国の好尚とは異なるものを出し、あるいは本像の作者が大陸から移住した工人であつたとさえ想像させられる⁽¹⁹⁾」とし、作風や造像技法から渡来工人説を提唱した。毛利久氏は、唐の小型檀像を拡大したもので、刻技にのみ檀像本来の姿を留める日本的な檀像とされた⁽²⁰⁾。岡直己氏は、帰化人系氏族に

顕現した今木神とされ、延喜末年（九三二）天慶元年（九三八）にかけて製作された舶来品と見まがうほどの出来栄へと評された⁽²¹⁾。上原昭一氏は、新渡来工人の製作と考えたいほど、異国的な造形感覚にあふれるとされた⁽²²⁾。

こうした論考を敷衍して、中野玄三氏は、本像は長岡京時代（七八四～九四）に秦氏により整備された願徳寺に安置されたと想定され、作風から宝亀九年（七七八）か天応元年（七八一）の遣唐使と共に来朝した唐人が長岡京時代に製作した可能性を提示された。歴史的観点から渡来工人の関与を考察された画期的な論考である⁽²³⁾。この後、渡来工人か、唐代彫刻の強い影響下での製作とする論調が主流になる。久野健氏・田邊三郎助氏などである⁽²⁴⁾。

井上正氏は、衣文の「風動表現」に、盛唐期の画家、呉道玄の様風が消化され、彫塑への応用が果たされているので、中唐期の卓抜な力量をもつ来朝唐人作家とされた⁽²⁵⁾。

岡田健氏は複雑で多彩な構成にして、均衡のとれた体勢を保つ作例は盛唐期に繋がるとされた⁽²⁶⁾。

長岡龍作氏は、完璧な三次元性が実現されており、図像による製作と想定しにくく、着衣表現における質感と動勢の増大という点から中国人作と考えるべきとされた⁽²⁷⁾。浅井和春氏は、八世紀末頃、中国製檀像の影響を彷彿とさせる像とする。一方、新請来の図像写しの可能性も考慮すべきとする⁽²⁸⁾。

紺野敏文氏は、渡来僧や帰朝僧に伴う唐工人が造像に関わった可能性を想定し、空海が別当であつた長岡京の乙訓寺で、弘仁二―三年（八一―八二）に造立した「二部尊像」の一体で、虚空蔵菩薩求聞持法本尊の可能性を提示する⁽²⁹⁾。

松田誠一郎氏は、作風は延暦年間頃の木彫仏に共通し、八世紀末から九世紀初めの製作と推定され、唐檀像の名作にも匹敵するとされる。また、広隆寺に移された霊験薬師像の右脇侍像の可能性を提唱された⁽¹⁹⁾。

岩佐光晴氏は、奈良・平安時代、八・九世紀の代用材による中国からの請求檀像ないしは密接な関係をもつて造られたと指摘される⁽¹⁹⁾。この岩佐氏説を支持するのは、鈴木喜博氏・井上一稔氏・関根俊一氏などである⁽¹⁹⁾。

藤岡穰氏は、延暦期の最も正統的な作風を示す作例とされ、請求檀像との密接な関係が窺えるとの見解を示された。松田氏の唱えた霊験薬師三尊脇侍説を支持し、乙訓社が修理された延暦三年(七八四)頃に製作されたと想定された⁽¹⁶⁾。松田氏説を継承した藤岡氏説に近いのは、山本勉氏・皿井舞氏・中村恒克氏などである⁽¹⁶⁾。

最新の国宝解説書で文化庁執筆者は、「表情は強烈で、日本風でない」「強く、ねばり強い刀法は、さながら渡来した大陸の工人の手によって造られたかとさえ思わせる」とし、かつて「一時期は請求像あるいは渡来工人の作と考えられたこともある」としていた見解を変更している。また、「捺塑材による塑形を木彫に移し替えたような表現は木彫成立期ともいえる八世紀末の特色であり、その頃の制作とみられる」とし、九世紀としていた製作年代を遡らせている⁽¹⁹⁾。岩佐氏説と藤岡氏説を折衷したような見解である。

以上、先行研究では、製作年代は八世紀末ごろ、長岡京時代に盛唐から中唐彫刻の強い影響下、木彫成立期に造像されたとするのが近年の見解である。製作者に関しては、請求像か、渡来の中国工人か、請求像や渡来工人に学んだ日本工人か、いまだ定説がない。

製作技法

眼の黒目(左目)に黒曜石の珠を嵌入する。木彫像の黒目部分だけに別材

を嵌入する技法は中国伝来と考えられている。この技法の作例は八・九世紀にかけての唐代彫刻の影響を受けた像にみられる⁽¹⁹⁾。

また右前膊を体に密着させて彫る方法は、木彫では行う必要がない、あえて彫りづらい構造を選択する特殊なもので、像本体から遊離する部分を彫る際、強度を増すために耐久性のある部分と接続させる中国の石彫技法に基づいており、木の材質を活かした造形表現を行っていないとの、本像を模刻した中村氏の具体的な指摘は重要と思われる⁽²⁰⁾。石彫を本分としていた中国工人が、木彫により造像したと考えられよう。

形式

中村氏は台座の蓮弁を十二方とし、三段になる蓮弁の段の高さを大きく変える葺き方が、同時期の作例では珍しい特殊な形式とされ、飛鳥時代や八世紀の唐時代に作例があると指摘する⁽²⁰⁾。岡田氏は「裾が蓮台の前面に懸かってその下の蓮弁の輪郭を見せるのは、中国の初唐から盛唐にかけて流行した表現形式で日本の作例としては珍しい」と指摘する⁽²⁰⁾。蓮弁に裾が懸かり輪郭を現す形式は、奈良時代、七七〇年代後半から七八〇年代にかけて製作されたと考えられている木心乾漆造の興福院阿弥陀三尊像の脇侍像にもみられる⁽²⁰⁾。この右脇侍像は前輯六・七頁に述べたように本像と右足を踏み下げる像容が類似している。しかし、蓮弁は四段に葺かれ、段の間隔が狭い、奈良時代に主流の形式であり、本像とは形式が異なる。

条帛は胸前で条帛の一方を裏から前方に回して長く伸ばし、天衣の下を潜り抜け脛に達し、渦を巻いて止まっている。この形式は他の彫像には類例がみられない。

作風

長岡氏は本像が「全体の着衣の複雑な表現が完璧な三次元性を有しなが

ら実現されて」おり、「平面的な型を制作の前提として想定しにくい」ので「着衣表現における質感と動勢の増大という点が中国での現象を正しく反映しているとすれば」中国作と考えるべきと指摘する。彫刻作品としての特徴を的確に述べて中国人作としたのは、傾聴すべき見解と思われる。⁽²⁰⁴⁾蓮弁に懸かる裙や腿を覆う裙には確かな質感が表現されている。

藤岡氏は、本像の衣褶表現は木彫による興福院阿弥陀三尊脇侍像などの本心乾漆像(捻塑像)写しが高度に達成されているとの見解を提示されている。⁽²⁰⁵⁾しかし、興福院像の鈍い衣褶表現から本像のような強弱のあるシャープな衣褶表現が造形できるとは考えがたく、逆に本像のような蓮弁の輪郭を見せるような裙の表現を、模倣しているかのように捉えられる。

平面的な図像を手本として日本の工人が造像した場合はもとより、本像を手本にして模倣したとしても着衣の複雑な動きの表現や質感そして衣に覆われた下の肉体の表現まで完璧に製作することは、熟練の日本工人でも至難な業ではなからうか。さらに図像類に像の背面までも描いてある例を知らない。本像の背面において、前方への動きに連動して、左肩から、はずれ滑り落ちた天衣が条帛とX字状に複雑に交差する構成と質感および表裏を变幻自在に変転させる天衣の動勢表現は、隙なく完璧に完成した姿で初発性があり、唐の渡来工人のオリジナルとするのが妥当であろう。

先行研究では、本像について大多数の論者は異国的な造形感覚を指摘している。ことに粘りがある彫り口の衣文の彫技について我が国のものではないとする見解が多い。

以上みてきたように作風・技法・形式などにより、本像は唐の工人の製作として間違いなさであろう。唐招提寺木彫群のように鑑真僧団の来日工人が製作や関与をしたと推定されている作例があるが、本像も来日工人が⁽²⁰⁶⁾

製作した可能性が考えられる。次項で考察したい。

造立背景と戒明の役割

桓武天皇が即位するまでの宝亀年間には政治上の混乱が続き、天変地異の多い激動の時代であった。宝亀元年(七七〇)に称徳天皇が崩じ、権勢をふるっていた道鏡は左遷された。十月、白壁王が即位して光仁天皇になる。

宝亀三年に光仁天皇皇后で聖武天皇の娘・井上内親王が巫蠱の罪により皇后を廃され、他戸親王も母の罪により皇太子を廃される。こうした混乱のなかで、宝亀四年に山部親王(のちの桓武天皇)が皇太子になる。宝亀六年には、幽閉中の井上内親王・他戸親王が変死する。山部皇太子の母は、渡来系氏族の和史乙継と土師真珠の女・和新笠(のちに高野新笠)である。古代、低い身分氏族から生まれた子は天皇になれなかった。不安定であった地位を、即位に向けて自らの血筋を皇統とし、正統性を主張する必要があったのである。⁽²⁰⁷⁾このために中国の「天命思想」を導入し、暦を操作してまで、桓武即位から遷都までの日程を定めたことが知られている。⁽²⁰⁸⁾

長岡京遷都は、桓武天皇が皇太子の頃から周到に準備され、大陸の新思想・新文化の導入は、桓武即位に向けて進められていた政権のバックボーン形成を目的とするものであったとの見解がある。⁽²⁰⁹⁾桓武は、新王朝の樹立を実感させる遷都を計画するにあたり、平城京の寺院を長岡京に移転させて前代との繋がりを断った。新渡来の仏教を興隆させて、南都の旧勢力に対抗させるために、最新の唐の仏教文化による彫像を唐の工人に製作させて、御願寺に安置して権威を示し、かつ新京を守護する役割を担わせる必要があったのである。⁽²¹⁰⁾東大寺と大安寺を統括していた早良親王は、兄の意向を承け、最新の唐文化を採り入れるため、宝亀の遣唐使の一員として戒明を任命した。様々な図像や文物を請来するために、史料は残されていない

いが、造東大寺司の工人も同行して、その任にあたつたと想像される。

唐での見学場所や請来品は唐政府に申請しなければならぬが、あわせて仏工招聘も要請したのではないだろうか。それが大暦十三年(宝龜九・七七八)三月二十二日、代宗皇帝の謁見の際に「請ふ所、並びに允さる」となり、さらに四月十九日、皇帝より唐使に答礼品を持たせて派遣しようとの口勅「今、中使趙宝英らを遣して、答の信物を將ちて日本国に往かしむ。」⁽²¹⁾「朕、少し許の答の信物を有てり。今、宝英らを差して押送せしむ。道義在る所、勞と為さず。」に、また「内使掖庭令趙宝英と判官四人を差して、国土の宝貨を賫し、使に随ひて来朝さ、隣好を結ばしむ」⁽²²⁾に繋がったのである。

返礼の唐使は、八世紀になって初めての特別の機会であつた。⁽²³⁾ 皇統の交代を、新王朝の誕生と理解して、慶賀のため使者の派遣を思い立ったのではないかとの指摘がある。⁽²⁴⁾

本像は、皇帝からの答信物「国土の宝貨」の場合もあるが、戒明の要請により仏工を唐使一行に含めた可能性がある。本像のような優れた彫像を製作する能力のある仏工は、唐においても一流の工人と思われる。井上正氏は、高い力量をもった人自身の移動と活躍なくして、本像の存在はないと評される。⁽²⁵⁾ 皇帝の命なくして招聘することは不可能であろう。すなわち、宝龜九年の戒明の帰朝と一緒に唐の工人が来朝し、本像を大安寺内で造像したと想定したい。同十年中には完成した可能性がある。⁽²⁶⁾

本像のように等身坐像でありながら、両脚部と蓮肉を含め、木芯を含まない一材から彫出する例は、他には見当たらず、その木取りから並大抵ではない造像背景を窺うことができるとされ、桓武天皇の発願ではないかと中村氏は想像されている。⁽²⁷⁾ まさに国家プロジェクトと捉えて相違ないであ

ろう。

長岡京遷都と本像

天智天皇の娘・鸕野讃良皇女(持統天皇)が創立したと伝える願徳寺の場所が、長岡京内裏の西北角方向(乾)になるように計画し、堂舎を再興して桓武天皇の御願寺とした。延暦三年(七八四)の長岡京遷都にあたり、本像を東向きに安置して本尊とし、桓武天皇御持仏の薬師三尊像も平城京より当寺に移した(前輯三・一〇頁)。本像は薬師像ともども桓武一族や長岡京の守護神とされたのではないだろうか。

願徳寺(御願寺)は、天智天皇の娘の創立であるので、母方・高野新笠(?・七九〇)および新笠の母・土師真妹の一族の拠り所とし、大安寺は七重東塔の四天柱に本像に基づき、聖徳太子に重なる三十三応現身像の基となる聖観音像を描き、父方・天智天皇―施基皇子―光仁天皇(七〇九―七八二)の拠り所にしたと想定される。血統に問題があつた桓武朝の皇統の正統性を示すためには、天智天皇に繋がる大安寺の興隆と最新の唐文化保持者としての先進性が必要だったと考えられる。

このように本像は新王朝を象徴する極めて政治的なモニュメントであり、早良親王と桓武天皇の共同成果といえるだろう。

怨霊鎮魂

延暦四年(七八五)長岡京造宮使の藤原種継が暗殺され、犯行の首謀者とみなされた早良親王は連座して、水や食料を絶たれて憤死する。この後、桓武一族に不吉なことがあいつぎ、親王の怨霊のたたりとされ、「崇道天皇」の追号がおくられ御霊として祀られる。⁽²⁸⁾

松田誠一郎氏は本像によく似た唐風の作風を示す道明寺十一面観音像や璉城寺聖観音像が、桓武天皇の外戚である渡来系氏族の氏寺にあり、造立

背景に天皇の存在が考えられると初めて指摘された⁽²⁰⁾。岩佐氏は、外戚の渡来系一族の寺に中国色の強い一木彫像があり、表現や形式が本像と共通する要素があると指摘する⁽²¹⁾。左の通りである。

①道明寺(土師寺)蔵「十一面観音立像」

菅原氏(もと土師氏改姓) 河内国志紀郡土師郷(藤井寺市)

共通点、二重まぶた・眼の瞳に黒珠嵌入・肉体の質感表現・細やかな彫刻表現。

②秋篠寺蔵「十一面観音立像」

秋篠氏(もと土師氏改姓) 大和国添下郡(奈良市)平城宮の西北の地

共通点、異国風の風貌・背面で条帛と天衣をX字状に交差させる・背面の髪際を後方へ反らす。

③璉城寺(紀寺の後身)蔵「聖観音立像」

紀氏(父方の外祖母) 平城京(奈良市)

共通点、異国風の風貌・髻の形・背面の髪際を後方へ反らす。天冠台の形は道明寺蔵「十一面観音立像」に通ずる。

岩佐氏は採り上げていないが、左の一木彫像も土師氏(菅原氏)に関係するであろう。

④広智寺(黄檗宗寺院)蔵「八臂観音立像(寺伝不空羅索観音立像)」

上宮天満宮(大宰府天満宮に次ぎ創建・土師氏の祖、野見宿祢も合祀)に隣接(高槻市)

共通点、異国風の風貌・眼の瞳に珠嵌入の跡・髻の形は本像、天冠台の形は道明寺蔵「十一面観音立像」に通ずるとされる⁽²²⁾。長岡京にも近い。

山形・宝積院蔵「十一面観音立像」も作風や形式から畿内の一族関係寺院での造立が想定されよう⁽²³⁾。

桓武天皇の外戚である渡来系氏族にとって、本像は一族の文化の先進性を示す象徴であり、誇りとする霊験仏とされたのではないかと思われる。

また、模倣が桓武朝の外戚顕彰政策の一環として、一族のみに許されたとの見解があり⁽²⁴⁾、不当な扱いを受けてきた一族の結束を高め、アイデンティティの確立に繋がったのではないかと思われる⁽²⁵⁾。さらに、本像は早良親王が関与して製作した故に親王の霊を慰めるため、一族の氏寺に仏像を造る際に、本像を根本像として作風や形式を似せて製作することに繋がったのではないだろうか。というのも、十一面観音には怨霊を鎮める呪力⁽²⁶⁾があるので、怨霊となった親王を何としても鎮めたいとの切実な願いが桓武一族にあったからである。ちなみに、不空羅索観音には怨讐を消滅させる効験⁽²⁷⁾がある。

桓武天皇は、早良親王が関与して製作させた本像を手本に造像させることにより怨霊を鎮め、天皇一族に災厄が及ばないようにと願ったことであろう。

おわりに

今回見出した奈良国立博物館蔵「諸観音図像」中の大安寺七重東塔壁画に描かれた白描聖観音像に相似する本像の検討を行った。「はじめに」で述べたように、本像は尊名・坐勢・製作地・製作者・製作環境などで意見の一致をみないとした。これらを考察し、以下のように結論づけた。

尊名

白描聖観音像と本像は、像容が相似していることを例証した。ことに天冠台の花環から髪束を二条左右に振り分ける表現および胸前で条帛の一方

を裏から前方に回して長く伸ばし、しかも天衣の下を潜り抜け、脛にまで達し、渦を巻いて止まっているなど細部の、他に例を見ないところでも一致している。本像の尊名は聖観音像と称するのが妥当とした。

坐勢

半跏像と称するのは足を腿に載せないで誤用との見解があるが、經典に足を腿から外し、垂下させても半跏趺坐との記述があるので、慣用的に用いられてきた半跏像と称しても妥当とした（以上、前輯）。

形状と作風

本像は、蓮台から降りようとする、その一瞬の肉体の右にねじれる微妙な筋肉の動きまでも表現されている。眼の二重まぶたおよび瞳に黒曜石（左眼）を嵌入した張りのある理智的な表情の面相は異国風である。うねるような変幻自在な天衣の構成は、複雑な表現でありながら、全く破綻がなく、完璧な三次元性の実現されている。蓮華座に懸る裙に覆われた蓮弁には確かな質感と写実がある。背面において、条帛とX字状に交差する構成と造形表現は、隙なく完成した姿である。以上のような特徴から唐の工人のオリジナルとするのが妥当とした。また天冠台の花鏤から髪束を出す表現および後頭部の天冠台の留め具などは他に類例がなく、さらに条帛を長く伸ばして天衣の下を潜り抜け、脛で渦を巻いて止まっている例も他にない。本邦製作の彫像には類例がみられない孤高の作例となっている。

製作者・製作地

眼の黒目に別材を嵌入する技法、台座の蓮弁を十二方とし蓮弁の段の高さを大きく変える葺き方の形式などは唐の影響がみられる。耐久性のある部分と接続させる中国の石彫技法に基づく技法や粘りのある彫り口から石彫を本分としていた唐の工人の製作になると推定した。

白描聖観音像が描かれていた大安寺七重東塔は、出土瓦から奈良時代末期に漸く完成したと想定した。塔のある南塔院造営に関わったのは、光仁天皇の愛子である早良親王で、大安寺と東大寺の最高責任者であった。親王はここに最新の唐文化を採り入れ造営に役立てること、また遷都の準備として新京を守護するのに相応しい最新の仏像を請求する目的をもって、

宝亀六年（七七五）の遣唐使の一員として大安寺僧の戒明を任命した。この宝亀の遣唐使は、唐の代宗皇帝が、称徳天皇から光仁天皇への皇統の交代を新王朝の誕生と理解して、慶賀の返礼唐使を派遣するという八世紀になってからは、初の機会であった。これを機に皇帝に要請して、唐使の一行に、唐の工人（仏師）を含めてもらったのではないかと想定した。宝亀八年に入唐した戒明は翌年に帰朝し、宝誌和尚十一面観世音菩薩真身像ほか、様々な図像や經典ならびに新情報をもたらした。

宝亀九年の遣唐使船で唐の工人が来朝し、本像を造像したと想定した。本像の模刻をされた中村恒克氏の御教示によると、六か月位で製作可能とのことなので、同十年中には完成した可能性がある。製作場所は早良親王や戒明の関係により大安寺南塔院と想定した。

製作環境

長岡京遷都は、桓武天皇が皇太子であった宝亀年間（七七〇～七八〇）から周到に準備された。血統に問題を抱えていた桓武朝の皇統の正統性を示すためには、唐の新思想・新文化を導入することによって、天智天皇に繋がる大安寺の興隆を図り、また最新の唐文化保持者としての先進性が必要とされたと考えられる。

唐の工人に最新の唐仏教による本像を製作させ、これを手本として東塔壁画に聖観音像が描かれたと推定した。東塔壁画は大安寺創始者の聖徳太

子を中心に、化身を主題として描かれたと考察した。太子は観音の化身と信じられていたので、本像が室町時代に聖德太子の作とされたのも、当初からそう喧伝されていたかと窺われる。本像は桓武新王朝の誕生を象徴する極めて政治的なモノユメントであり、早良親王と桓武天皇の共同による成果といえよう。

安置場所

皇統の祖・天智天皇の娘である鸕野讃良皇女(持統天皇)が創立したと伝える願徳寺の寺地を長岡京内裏の西北角(乾)方向になるように計画して、堂舎を再興して桓武天皇の御願寺とした。本像を東向きに安置して本尊とし、桓武天皇御願の薬師三尊像も平城京より当寺に移した。本像は薬師像ともども桓武一族や長岡京の守護神とされたと推定した。

願徳寺(御願寺)は、天智天皇の娘の創立であるので、母方の高野新笠や新笠の母の一族・土師氏の拠り所とし、大安寺は七重東塔の四天柱に、本像に基づいて、聖德太子と重なる三十三応現身像の基となる聖観音像を描き、父方の天智天皇―施基親王―光仁天皇の拠り所にしたと想定した。

模倣

桓武天皇の母である高野新笠はじめ外戚の渡来系一族にとって本像は、文化の先進性を示す象徴であり、誇りとする霊験仏であったのではないかと思われる。本像を写す行為が桓武朝の外戚顕彰政策の一環として、渡来系一族のみに許されたと指摘されている。氏寺に仏像を造る際に、十一面観音には怨霊を鎮める呪力、また不空罽索観音には怨讐を消滅させる効験があるので、怨霊となった早良親王を鎮めるために、親王が関与した本像を根本像として、作風や形式を似せて製作することに繋がったと想定した。

今後の展望

藤岡氏の「むしろ宝菩提院菩薩坐像(本像)こそ延暦期の最も正統的な作風をしめす作例とみるべきではないだろうか」との見解は卓見であり、賛同したい。藤岡氏は、延暦三年(七八四)、長岡京遷都頃の製作と想定されるが、これを遡るわずか五年前の製作と推定することにより、七八〇年代以降の造像、例えば、桓武天皇の創建と伝えられる秋篠寺の脱活乾漆像群や西大寺の塔本四仏像・興福院の阿弥陀三尊像などに新たな視点が開かれるのではないかと思考する。また、唐の工人を一人と限る必要はないだろう。例えば、もう一人に本像に作風や石彫に基づく技法が類似する道明寺十一面観音立像の工人を想定するのも一考であろう。これらの問題に関しては今後の課題としたい。

註

- (113) 清水真澄氏が同様の趣旨の見解を示されていることを、前掲刊行後知った。清水真澄「鎌倉 禅居院の観音菩薩半跏像について―中国像との形姿の比較を中心にして―」(『成城大学短期大学部紀要』三〇、一九九九年)、六三―六四頁。
- (114) 追塩千尋「別当とその出身寺院」(『中世南都の僧侶と寺院』吉川弘文館、二〇〇六年)、一七三―一七六頁。
- (115) 生井真理子「大安寺塔中院建立縁起と石清水」(『仏教文学』三九、仏教文学会、二〇一四年)、九三頁。「大安寺の復興に興福寺僧が関わり、塔中院や古老の伝承を詳しく知る機会はいえ」と指摘している。
- (116) 大安寺の沿革について左の書を参照した。
- ① 大安寺史編集委員会編『大安寺史・史料』(大安寺、一九八四年)。
- ② 菅谷文則『大安寺伽藍縁起并流記資財帳を読む』(南都 大安寺編『大安寺歴史講座』1、東方出版、二〇二〇年)。

③森下恵介『大安寺の歴史を探索』(南都 大安寺編『大安寺歴史講座』2、東方出版、二〇一六年)。

(117) ①中川由莉「奈良時代の大安寺―仏教受容におけるその役割―」(『寧楽史苑』五二、奈良女子大学史学会、二〇〇七年)、三〇―三二頁。

②前掲註(116)③森下書、一一五―一九頁。日本では、まとまって出土することのない唐三彩の陶枕が五十個体以上出土しており、国際性を物語っている。金堂の遺物とされ、道慈が請来した可能性が指摘される。

(118) 早良親王については、主として左の書を参照した。

①柴田博子「早良親王―(皇太子置定)の困難」(吉川真司編『古代の人物 平安の新京』清文堂出版、二〇一五年)。4

②西本昌弘「早良親王」(吉川弘文館、二〇一九年)。

(119) ①山田英雄「早良親王と東大寺」(『南都仏教』一一、南都仏教研究会、一九六二年)、七四―七六頁・八〇―八一頁。

②高田淳「早良親王と長岡遷都―遷都事情の再検討―」(『日本古代の政治と制度』続群書類従完成会、一九八五年)、一九九―二〇五頁。「寺内行政全般の統括権と造東大寺司に対する指揮権」を併せ持つ最高指導者の地位に就いたとされる。

(120) ①前掲註(118)②西本書、五〇―五三頁。

②山本幸男「早良親王と淡海三船―奈良末期の大安寺をめぐる人々―」(『弘法大師の思想とその展開 高野山大学 密教文化研究所紀要』別冊1、密教文化研究所、一九九九年)。のち『奈良朝仏教史攷』(法蔵館、二〇一五年)に所収、二四七―二四八頁。

(121) 前掲註(116)③森下書、八〇頁。

(122) 松田和晃「大安寺資財帳の成立に関する一考察」(『法学研究・法律・政治・社会』六四―一 慶應義塾大学法学研究会、一九九一年)、二〇七頁。

(123) 『続日本紀』天平神護二年十二月己酉条。

(124) 『続日本紀』神護景雲元年三月戊午条。「戊午、幸大安寺。授、造寺大工正六位上輕間連鳥鷹、外従五位下」。

(125) 太田博太郎「大安寺」(『南都七大寺の歴史と年表』岩波書店、一九七九年)、

八四頁。

(126) 『続日本紀』神護景雲元年条。二月、東大寺。山階寺。三月、元興寺。西大寺法院。大安寺。葉師寺。巡幸の順序は五番目であり、官寺筆頭であった大安寺の地位低下を示す事象と考えられる。

(127) 『諸寺縁起集 醍醐寺本』「大安寺碑文一首并序」(藤田経世編『校刊美術史料 寺院篇 上巻』中央公論美術出版、一九七二年)、八六―八七頁。

(128) 『大安寺碑文』には、「図八相之銀壁」の文言があり、釈迦八相図が銀壁(白壁のこと)に描かれていた。葉師寺東塔に釈迦八相の彫像があつたように塔壁画の主題として相応しいが、銀壁から塔ではなさそうである。伽藍の復興部分に続く文言なので、金堂の壁に新たに描いたと考えたい。

金堂跡北側の焼土層から「彩色漆喰片」が出土しているのもこれを証している。

『特別展 大安寺のすべて 天平のみほとけと祈り』(奈良国立博物館、二〇二二年)、図版39「彩色漆喰片」。

(129) 前掲註(116)③森下書。一四七―一六七頁。以下、東西両塔については本書を参照した。

(130) 服部匡延「平安時代における大安寺の回縁と復興の概観」(『美術史研究』三、早稲田大学美術史研究会、一九六四年)。

(131) 服部匡延「古史料にみる大安寺七重塔壁画の諸問題」(『美術史研究』一〇、早稲田大学美術史学会、一九七三年)。

(132) 前掲註(127)藤田編書、二六頁。

(133) 前掲註(127)藤田編書、四三―四四頁。

(134) 前掲註(127)藤田編書、九六―九七頁。

(135) 武田賢壽「奈良時代における太子信仰の形成―法華信仰から浄土信仰へ―」(『同朋学園仏教文化研究所紀要』一〇、同朋学園仏教文化研究所、一九八九年)、八―九頁。

(136) 真鍋俊照「不空羼索観音の表現とその普遍性」(『印度学仏教学研究』六五―一、日本印度学仏教学会、二〇一六年)、一五〇頁。

(137) 蔵中しのお編「『南天竺婆羅門僧正碑并序』注釈」(『水門―言葉と歴史―』

二一、水門の会、二〇〇九年)、四二頁。

- (138) 『日本霊異記』(『新編 日本古典文学全集10』小学館、一九九五年)、三六五頁。

- (139) 神野祐太「大安寺戒明請来の宝誌和尚像について」(『仏教美術論集』6組 織論—制作した人々、竹林舎、二〇一六年)、二一〇頁。

- (140) 中国・南北朝時代の南朝・梁の武帝は、道教を捨て仏教に帰依し、中国で初めての無遮大会を催した。都の建康(金陵)には寺院が七百余所、僧尼が常に万人といわれるほど仏教が隆盛した。菜食を守り戒律の生活を送ったため「皇帝菩薩」と称された。鎌田茂雄『中国仏教史』(岩波書店、一九七八年)、九五、九七頁。

- (141) 宝誌和尚は、幼少に出家し僧儉に師事して禅法を修した。長髪・跣の異様な身なりで、剪刀・鏡・帛をかけた錫杖を執り、街中を放浪していた。予言をよくし、神異を現した。十一面観音の化身といわれ、顔面より十一面観音を現す神異で知られている。絵師が宝誌和尚を描こうとしたが、様々な姿に変身し描けなかったとの説話が伝えられている。梁の武帝は当初は弾圧をしたが、のちに宝誌和尚に深く帰依した。

①前掲註(140)鎌田書、一二九頁。

- ②慧皎撰『高僧伝』十 神異下 保誌伝(以下、『梁高僧伝』と表記する)(『大正新修大蔵経』五〇(SAT大正新修大蔵経テキストデータベース)、No. 2069.394~396)。以下、『大正新修大蔵経』は、本データベースを参照した。

- (142) この文言は、敦煌出土文書(スタイン本S.117)にも記されている。

矢吹慶輝『鳴沙余韻 敦煌出土未伝古逸仏典開宝』下(岩波書店、一九三〇年)図版七八頁・解説編二〇九~二一〇頁。

- (143) 毛利久「宝誌和尚像」(『古文化』一、大八洲出版、一九四八年)。のち『日本仏像史研究』(法蔵館、一九八〇年)に所収。

- (144) 思託は大安寺の唐僧道瑤に頼まれて、大安寺唐院で律の講義を漢語で四、五年行っている。師の伝記『大唐伝戒師僧或名記大和上鑑真伝』を著わし、これをもとに思託が宝亀十年に淡海三船に要請して『唐大和上東征伝』が撰述されたことでも知られる。思託について左の論文を参照した。

宝菩提院願徳寺蔵「国宝 菩薩半跏像(伝如意輪観音)」と相似する白描図像について(下)

①藏中進「思託—渡来僧の生涯と文学—」(『日本文学』二二、日本文学協会、一九七四年)。のち『唐大和上東征伝の研究』(桜楓社、一九七六年)に所収。

②藏中しのぶ「渡来僧と大安寺文化圏—新羅僧・元曉と淡海三船—」(『アジア遊学』4、勉誠出版、一九九九年)。のち『奈良朝漢詩文の比較文学的研究』(翰林書房、二〇〇三年)に所収。

- (145) 『日本高僧伝要文抄』三(『新訂増補 国史大系』三一、吉川弘文館、一九六五年)、八八頁。

完本は現存せず、東大寺の宗性撰『日本高僧伝要文抄』ほか教書に逸文が収録されている。本文については、藏中しのぶ『延暦僧録』注釈(『大東文化大学東洋研究所、二〇〇八年、二四四~二五〇頁を参照した)。

①松本信道『延暦僧録』戒明伝の史料的特質(『駒沢史学』三七、駒沢史学会、一九八七年)。

②後藤昭雄『延暦僧録』考(『国語と国文学』六五—二、至文堂、一九八八年)。のち『平安朝漢文文献の研究』(吉川弘文館、一九九三年)に所収、六~七頁。

- (146) 王勇「聖徳太子時空超越」(大修館書店、一九九四年)、二八〇~二八二頁。

- (147) 『本朝高僧伝』四「和州大安寺沙門戒明伝」(『大日本仏教全書』一〇二、仏書刊行会、一九一三年)。

(148) 『大乗三論師資伝』「次桂畏八嶋聖皇(早良親王)、特降諭旨玄覺法師、遣唐請益、法師含忠訪道、帰朝伝灯、今吾三代之祖師也」。本書によると、玄覺は元興寺智光の弟子靈寂に学んだ東大寺の僧である。

伊藤隆寿「香山宗撰『大乗三論師資伝』について」(『印度学仏教学研究』二七—二、日本印度学仏教学会、一九七九年)、二九六頁。

伊藤隆寿「香山宗撰『大乗三論師資伝』」(駒沢大学仏教学部論集)一一、一九八一年)、一六七頁。

- (149) 宝亀三年説

①安藤更生「支那典籍に現れたる鑑真大和上とその門流」(『唐招提寺論叢』桑名文星堂、一九四四年)、一四頁。

②東野治之「日唐間における渤海の中継貿易」(『日本歴史』四三八、吉川弘文館、

一九八四年)。のち『遣唐使と正倉院』(岩波書店、一九九二年)に所収、一三二頁。

宝龜三年二月の渤海使の帰国に便乗して、入唐したと推定されている。

③前掲註(146)王勇書、二七五～二七六頁。

〈宝龜八年説〉

①小野玄妙「奈良朝末期の入唐僧大安寺戒明阿闍梨」(『仏書研究』一〇、仏書刊行会、一九一五年)。のち『仏教の美術と歴史』(金尾文淵堂、一九三七年)、九〇〇～九〇二頁に所収。

②藏中進「唐大和上東征伝の研究」(桜楓社、一九七六年)、一三五～一五二頁。

③松本信道「徳清の入唐について」(『駒沢大学文学部研究紀要』六八、駒沢大学、二〇一〇年)、三～六頁。

④西本昌弘「大安寺僧戒明が請来した唐代の宝誌像」(『関西大学東西学術研究所紀要』五三、関西大学東西学術研究所、二〇二〇年)、四三頁。

(150) 円仁が承和五年(八三八)に請来した唐僧の明空撰『勝鬘經疏義私鈔』一(『大日本仏教全書』四、仏書刊行会、一九一四年)に左の記事があることによる。

今上宮王疏所釈、即是後訳経。有二十一紙。其疏唐大暦七年、日本国僧使誠明得清等八人、兼法華疏四卷、将来揚州。与龍興寺大律師闍梨靈祐。其上宮王、是安南都護見衡姑也。相伝云、是梁南嶽高僧思大禪師(慧思)後身。献呈された靈祐は、鑑真的第四次渡航が失敗した原因となった、官に密告した僧である。日本で仏教が興隆しており、鑑真的見通しの正しさを伝えたかったのであろう。

また、円珍撰『大毘盧遮那成道経義釈目録縁起』(『智証大師全集』園城寺事務所、一九一八年、七〇一頁)に左の記事がある。

録之来由者、如余所聞件義釈従大唐来我国且五本焉。今見有四。謂西大寺得(徳)清が入唐した年を大暦七年としている。

(151) 『続日本紀』宝龜九年十月乙未条、十一月壬子条、十一月乙卯条。

(152) 松本信道「『靈異記』下巻 十九縁の再検討―その史実と虚構―」(『駒沢大学文学部研究紀要』五三、駒沢大学、一九九五年)、一一〇～一一一頁。大安寺

僧戒明大徳が、宝龜八年四月に佐賀で安居会に『華嚴経』を講じるとの記事がある。

(153) 宝龜八年説の松本信道氏は、宝龜三年説の根本史料である現存最古本・西教寺藏『勝鬘經疏義私鈔』の書写年代が明暦二年(一六五六)と新しく、大暦七年は大暦十二年の「十二」の草書体を「七」と過去の書写の際に誤写したのではないか。さらに「日本国僧使」は公式の遣唐使に随行した僧と考えるべきで、中国の記録や正史には宝龜三年は記録されていないとして再考すべきと指摘している。また「大毘盧遮那成道経義釈目録縁起」の割註「大暦七年到唐、未委帰年也。」は、後世の校訂者の補入とされる。松本信道「宝誌像の日本伝播(2)天台入唐・入宋僧を中心として」(『駒沢大学文学部研究紀要』六五、駒沢大学、二〇〇七年)、三～六頁。

しかし、同書の空海や円仁などの記事にも、入唐・帰朝の年月等が割註で記され、同体裁なので、円珍が施したのではないかと思われる。しかも『大日本仏教全書』本『勝鬘經疏義私鈔』の跋文は、貞観十三年(八七二)に円珍が記しており、本文中の「大暦七年、日本国僧使誠明得清」の記事を見て、割註を施した可能性もある。誤写とするのは、難しいのではなからうか。

(154) 前掲註(145)①松本論文、三九～四四頁。

(155) 勝浦令子「正倉院文書にみえる天台教学書存在形態」(『日本仏教の史的展開』塙書房、一九九九年)、四九頁。

(156) 宝誌和尚像の請来について、左の論文を参照した。

①松本信道「宝誌像の日本請来の背景について」(『駒沢大学文学部研究紀要』六三、駒沢大学、二〇〇五年)。

②松本信道「宝誌像の日本伝播(1)大安寺を中心として」(『駒沢大学文学部研究紀要』六四、駒沢大学、二〇〇六年)。

③松本信道「宝誌像の日本伝播(2)天台入唐・入宋僧を中心として」(『駒沢大学文学部研究紀要』六五、駒沢大学、二〇〇七年)。

④前掲註(139)神野論文、一四頁。

「宅」には墓所の意味があり、鍾山独龍阜に葬られた宝誌和尚の墓所を開善寺としたという。

⑤西本昌弘「大安寺僧戒明が請来した唐代の宝誌像」(『関西大学東西学術研究所紀要』五三、関西大学東西学術研究所、二〇二〇年)。

- (157) 宝誌和尚像の類例については、前掲註(137)神野論文、一四〇一五頁を参照した。

- (158) 前掲註(145)①松本論文、二二頁。

- (159) 前掲註(144)②蔵中しのお論文、四四頁。

- (160) 田林啓「神異僧をめぐって」(『神異僧と美術伝播』中央公論美術出版、二〇二一年)、一七頁。

- (161) 瑯琊王は南北朝時代に山東省瑯琊郡を本拠としていたが、西晋の滅亡後、東晋の成立と共に指導者となり、都の建康(金陵)に移住する。東晋の政治や文化の発展に大きな役割を果たした名族で書聖王羲之はその一族である。金陵(南京象山)一族の墓がある(前掲註(145)①松本論文、四一〜四二頁)。

『延暦僧録』の「從高僧沙門釈思託伝」に「思託、沂州人。住開元寺、後入天台山。俗姓王氏、瑯琊王仙人王喬之後」とある(『日本高僧伝要文抄』三、前掲註(145)書、七九〜八〇頁)。

- (162) 『妙法蓮華経第一 序品第一』(『大正新修大蔵経』九、No.0282.0002c)。
『大智度論卷第七 大智度初品中放光釈論第十四』(『大正新修大蔵経』二五、No.0108.11ab)。

- (163) 原品は唐時代、八世紀の製作。縦一〇四・八㎝、横二九・〇㎝。
MIHO MUSEUM編『獅子と狛犬(青幻舎、二〇一四年)、六六・二三八頁。

- (164) 傳大士の思想は仏頂系密教の『大仏頂経』と密接な関連を有しており、戒明が真経との「唐決」を請求したため起きた真偽論争では、思託は真経説を擁護した。それも宝龜十年に、思託は東大寺において蝦夷の反乱の鎮圧を願って本経による「大仏頂行道」を修しているの、自説の正当性を示す必要があったからとされている(前掲註(145)①松本論文、三九〜四四頁)。

- (165) 『岩波仏教辞典』(岩波書店、一九八九年)。「傳大士」の項目を参照した。

- (166) 安藤更生『鑑真大和上伝の研究』(平凡社、一九六〇年)、一一一〜一二四頁。

- (167) 前掲註(146)王勇書、一三三頁。

- (168) 辻善之助「聖德太子慧思禪師後身説に関する疑」(『歴史地理』五三一、吉川弘文館、一九二九年)。のち『日本仏教史研究 第三卷 日本仏教史の研究 続編 上』(岩波書店、一九八四年)に所収、七七八頁。

- (169) 慧思の肖像は、淡海三船が神護景雲元年(七六七)称徳天皇の聖徳宮寺(法隆寺)行幸時に作った詩に「南嶽留禪影 東州現応身」とあるので法隆寺に存在したと知られる。勅撰漢詩集の『経国集』一〇(『群書類従 第八輯』二二五、群書類従刊行会、一九五三年)に収録。

- (170) 中野聡「靈驗仏として的大安寺釈迦如来像」(『仏教芸術』二四九、毎日新聞社、二〇〇〇年)、八八頁。

- (171) 『七大寺日記』(前掲註(132)藤田編書)・『七大寺巡礼私記』(前掲註(133)藤田編書)。
(172) 小原二郎「研究資料 日本彫刻用材調査資料」(『美術研究』二二九、東京文化財研究所、一九六四年)、三七頁。小原氏が調査した標本は平成三十年(二〇一八)に東京国立博物館に寄贈されたが、この中に本像の標本はない。

金子啓明(小原二郎氏旧蔵木彫像用材調査標本)について(『MUSEUM』六七九、中央公論事業出版、二〇一九年)。

- (173) ①金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之「日本古代における木彫像の樹種と用材観」七・八世紀を中心に(『MUSEUM』五五五、東京国立博物館、一九九八年)、四一〜四二頁。

②岩佐光晴「日本彫刻史研究における木彫像の樹種同定の意義——木彫像成立の問題を中心に——」(『仏像の樹種から考える 古代木彫像の謎』東京美術、二〇一五年)、五〇頁。

- (174) 藤井智之「木彫像の樹種——木彫像用材の科学的分析——」(『特別展 仏像——木にこめられた祈り』東京国立博物館、二〇〇六年)、一三三頁。

- (175) 伊東隆夫「中国由来の木彫像の用材観」(『科学研究費助成事業 研究成果報告書』二〇一八年)。

- (176) 松田誠一郎「菩薩踏下像(伝如意輪観音)」(『週刊朝日百科 日本の国宝 京都・清涼寺 宝菩提院 大覚寺 長福寺 妙心寺 退蔵院』朝日新聞社、一九九七年)、一七二頁。

- (177) 鈴木喜博「檀像の概念と栢木の意義」(『日本美術全集 第5巻 密教寺院と

宝菩提院願徳寺蔵「国宝 菩薩半跏像(伝如意輪観音)」と相似する白描図像について(下)

仏像 平安の建築・彫刻Ⅰ」講談社、一九九二年、一七七～一七八頁。

- (178) ①豊秋(源豊宗)「美術史雑誌 宝菩提院の月光菩薩像」(『仏教美術』一六、仏教美術社、一九三〇年)。のち『源豊宗著作集 日本美術史論究 3 天平・貞観』思文閣出版、一九八〇年に所収、加筆訂正あり。二二七～二四三頁。

②源豊宗 図版解説「39菩薩半跏像」(『京都の国宝』文化財保護法施行十周年京都記念会、一九六一年)。

- (179) 滝精一「菩薩半跏像」(『日本古美術案内』丙午出版社、一九三二年)。

- (180) 筆者不詳 図版解説「一四三三 菩薩像 寺伝如意輪観音像」(『日本国宝全集』七二、日本国宝全集刊行会、一九三六年)。

- (181) 文化財保護委員会執筆 図版解説「二、木造菩薩半跏像(本堂安置)」(文化財保護委員会監修『日本文化財』二五、新国宝特集号、財団法人奉仕会、一九五七年)。

同様な文言の表現が、倉田文作「平安時代作品の4 京都宝菩提院の菩薩半跏像」(『仏像のみかた(技法と表現)』第一法規出版、一九六五年)、一五八頁にあるので、倉田文作氏の説と思われる。

- (182) 毛利久「平安時代の檀像について」(『史窓』一三、一九五八年)。のち『日本仏教彫刻史の研究』(法蔵館、一九七〇年)に所収、一四四頁。

- (183) 岡直己「宝菩提院菩薩半跏像考」(『美術史』三二、便利堂、一九五九年)、九九～一二二頁。

- (184) 上原昭一 図版解説「387・390 菩薩半跏像」(『国宝彫像 第二巻』徳間書店、一九六七年)。

- (185) ①中野玄三 図版解説「84 菩薩半跏像」(『京都の仏像』淡交社、一九六八年)。

②中野玄三「密教像の成立と展開—平安時代彫刻史」(『仏教美術入門 第四巻 密教の美術』平凡社、一九九一年、一〇三・一〇五頁。「遣唐船の帰還にさいし、檀像彫刻を専門とする彫師と称する仏師が、相当数日本に來朝し、かれらの作品が群を抜いて優れていたため、日本でいたく尊重されそのうちのいくつかが今日まで残ったものと思われる」とされる。

- (186) ①久野健「二三 宝菩提院半跏菩薩像」(第二章 平安初期の菩薩像)『平安初期彫刻史の研究』吉川弘文館、一九七四年。

②田邊三郎助「木彫像—中国と日本—」(『国際交流美術史研究会第九回シンポジウム 美術史における過渡期と転換期』国際交流美術史研究会、一九九一年)。のち『田邊三郎助彫刻史論集』(中央公論美術出版、二〇〇一年)に所収、九一～九二頁。

- (187) ①井上正「法華寺十一面観音立像と呉道玄様—檀像系彫刻の諸相Ⅳ—」(『学叢』九、京都国立博物館、一九八七年)、三五～三六頁。

②井上正「古密教彫像巡歴 一〇 京都・宝菩提院菩薩半跏像」(『日本美術工芸』五八九、日本美術工芸社、一九八七年)。のち『続 古仏—古密教彫像巡歴』(法蔵館、二〇一二年)に所収、五八～六三頁。

- (188) 岡田健 図版解説「59 如意輪観音半跏像」(『特別展 檀像 白檀仏から日本の木彫仏へ』奈良国立博物館、一九九一年)。

(189) 長岡龍作「仏像表現における〈型〉とその伝播(下)—平安初期菩薩形彫刻に関する一考察—」(『美術研究』三五二、東京文化財研究所、一九九二年)、二七頁。

- (190) 浅井和春 図版解説「7 菩薩半跏像」(『日本美術全集 第五巻 密教寺院と仏像 平安の建築・彫刻Ⅰ』講談社、一九九二年)。

(191) 紺野敏文「虚空藏菩薩像の成立(中)—求聞持形の展開—」(『仏教芸術』二二九、毎日新聞社、一九九六年)。のち「第五編 虚空藏菩薩像の成立 第二章 求聞持形の展開」(『日本彫刻史の視座』中央公論美術出版、二〇〇四年)に所収、五八七～六〇四頁。前輯一二頁で述べたように、空海関与や虚空藏菩薩説は、確証を得るためには史料が足りないとした。

- (192) ①前掲註(176)松田論文、一七二～一七三頁。

②松田誠一郎「第五〇回全国大会研究発表要旨 山背遷都と靈驗薬師仏—京都・宝菩提院菩薩踏下像の彫塑史的な位置づけに関連して—」(『美術史』一四三、美術史学会、一九九七年、一〇七頁。前輯五～一〇頁で述べたように、靈驗薬師三尊脇侍説は成立し難い。

- (193) ①岩佐光晴「平安時代前期の彫刻 一木彫の展開」(『日本の美術』四五七、至文堂、二〇〇四年、三〇～三一頁)。

②岩佐光晴「初期一木彫の世界」(『特別展 仏像 一木にこめられた祈り』

東京国立博物館、二〇〇六年、四一頁、および同書、図版解説「20菩薩半跏像(伝如意輪観音)」。

- (194) ①鈴木喜博「23菩薩半跏像」〔特別展 古密教―日本密教の胎動―〕奈良国立博物館、二〇〇五年)。

②井上一稔「菩薩半跏像 異国の風貌をもつ謎多き菩薩像」〔週刊朝日百科 国宝の美 13 彫刻5 天平後期・平安初期の仏像〕朝日新聞出版、二〇〇九年、二三―二五頁。

③関根俊一「洛西の仏像 〔三〕宝菩提院願徳寺」〔近畿文化〕八二〇、近畿文化会事務局、二〇一八年)、四頁。

- (195) 藤岡穰「様式からみた新薬師寺薬師如来像」〔様式論―スタイルとモードの分析(仏教美術論集I)〕竹林舎、二〇二二年)。のち「東アジア仏像史論」〔中央公論美術出版、二〇二二年)に所収、一六二―一六三頁・一六六―一六七頁。前輯五―一〇頁で述べたように、靈驗薬師三尊脇侍説は成立し難い。

- (196) ①山本勉「菩薩坐像」〔別冊太陽 仏像 日本仏像史講義〕平凡社、二〇一三年)。

②山本勉「宝菩提院菩薩像」〔日本仏像史講義〕平凡社新書七七五、平凡社、二〇一五年)、七九―八〇頁。

③皿井舞 図版解説「18菩薩半跏像」〔日本美術全集 第4巻 平安時代I 密教寺院から平等院へ〕小学館、二〇一四年)。

④中村恒克「宝菩提院菩薩半跏像および道明寺十一面観音菩薩立像の作風表現および造像技法における唐の影響について―画像の模刻制作を通して―」〔平成二十七年 東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程学位論文〕二〇一六年)、一―七五頁。

- (197) 文化庁執筆者 図版解説「菩薩半跏像(本堂安置)」〔国宝事典〕第四版、便利堂、二〇一九年)。変更前の見解は、文化庁執筆者 図版解説「7菩薩半跏像(伝如意輪観音)(本堂安置)」〔文化庁監修「国宝 5 彫刻II」(増補改訂版)毎日新聞社、一九八四年)による。

- (198) 中村恒克「模刻でわかる宝菩提院の超絶美仏」〔京都傑作美仏大全〕樺出版社、二〇一八年)、一九頁。右目は後補とされている。

宝菩提院願徳寺蔵「国宝 菩薩半跏像(伝如意輪観音)」と相似する白描画像について(下)

- (199) 平安前期以前の木彫像に、黒目嵌入の技法が用いられた作例を左に示す。前掲註(196)④中村論文、八頁を参照し、作例を付け加えた。

〔請来像〕

①奈良・法隆寺 九面観音立像。黒い球。唐・養老三(七一九)請来。

②京都・東寺 兜跋毘沙門天立像。兜跋毘沙門天立像および地天の黒目は黒石。腹前と両肩の獅鬚・尼藍婆・毘藍婆の黒目は木製。唐・九世紀。

③京都・東寺観智院 五大虚空蔵菩薩坐像。練物、材質は不明。唐・承和十四年(八四七)請来。

④大阪・観心寺、滋賀・千手寺、京都・善願寺二軀、東京・浅草寺、アメリカ・ミネアポリス美術館 僧形坐像。木製の珠。唐末―五代・九―一〇世紀。

⑤京都・清凉寺 釈迦如来立像。練物、鉋物の可能性あり。唐・永延元年(九八七)請来。

〔本邦作像〕

①奈良・唐招提寺 大自在王菩薩立像。亡失。奈良・八世紀。

②奈良・興福寺東金堂 四天王立像。木屎漆に黒漆を塗ったもの。平安・八―九世紀。

③大阪・道明寺 十一面観音菩薩立像。黒い球、材質不明。平安・八―九世紀。

④奈良・法華寺 十一面観音菩薩立像。半球形銅板。平安・八―九世紀。

⑤大阪・廣智寺 八臂観音菩薩立像(不空羼索観音像力)。亡失。平安・八―九世紀。

⑥滋賀・千手院 千手観音菩薩立像(御代仏)。金属製(銅板力)。平安・九世紀。

⑦兵庫・中山寺 十一面観音菩薩立像。鉄鉋。平安・九世紀。

- (200) 前掲註(196)④中村論文、四九・六一・六五頁。

(201) 前掲註(196)④中村論文、三五―三六頁。

(202) 前掲註(188)岡田図版解説。

(203) 松田誠一郎「天平後期彫塑の研究」〔昭和六十四年度 東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程学位論文、一九九〇年)、四〇二頁。作者は官営造仏所系の仏工とされる。

- (204) 前掲註(189)長岡論文、二七頁。

- (205) 前掲註(196) 藤岡論文、四一・四五頁。
- (206) 毛利久「唐招提寺彫刻の問題点」(『奈良六大寺大観 補訂版』一三、岩波書店、一九七二年初版・二〇〇一年補訂版)。
- (207) この項は、瀧浪貞子「I 皇位と皇統 五章 桓武天皇の皇統意識」(『日本古代宮廷社会の研究』思文閣出版、一九九一年)を参照した。
- (208) 清水みき「桓武朝における遷都の論理」(『日本古代国家の展開』上、思文閣出版、一九九五年)、三八四～三八六頁。暦を操作して天応元年(七八一)正月朔日を辛酉の年の辛酉の日として、この年に桓武は即位し早良親王は皇太子となる。長岡遷都は、延暦三年(七八四)の甲子革命の年である。翌年の十一月一日、「朔旦冬至」の日に長岡京の南西にあたる交野の地に天壇を設け、光仁天皇を始祖とする王朝の発足を示す唐風の郊祀を執行している。
- (209) 山中章「第I部長岡京総論 第二章 長岡京の諸段階」(『長岡京研究序説』塙書房、二〇〇一年)、一二一～一二五頁。
- (210) 皿井舞「模刻の意味と機能―大安寺釈迦如来像を中心に」(『京都大学文学部美術美術史学研究紀要』二二、二〇〇一年)、九九頁。
- (211) 榎本淳一「文化受容における朝貢と貿易」(『唐王朝と古代日本』吉川弘文館、二〇〇八年)、二六六～二七〇頁。
- (212) 『続日本紀』宝亀九年十月乙未(二十三日)条。遣唐第三船、判官小野滋野の復命報告。
「所請並允」・「今遣中使趙宝英等、将答信物、往日本国」・「朕有少許答信物。今差宝英等押送。道義所在、不以為勞」
『続日本紀』宝亀九年十一月乙卯(十三日)条。遣唐第一船、判官大伴継人の復命報告。
「差内使掖庭令趙宝英、判官四人、賁国土宝貨、随使来朝、以結隣好」
釈文は『続日本紀 五』(『新日本古典文学大系』一六、岩波書店、一九九八年)による。判官大伴継人は、藤原種継暗殺の謀議人として斬首されているので、早良親王に近い人物である。
- (213) 東野治之「遣唐使船 東アジアのなかで」(朝日新聞社、一九九九年)、三八頁。
- (214) 栄原永遠男「宝亀の唐使と遣唐使」(『専修大学東アジア世界史研究センター年報』二、専修大学社会知性開発研究センター、二〇〇九年)、四五頁。
- (215) 前掲註(187)②井上正論文、五八～六三頁。
- (216) 本像の製作に要する期間は、模刻をされた中村恒克氏にお尋ねしたところ、およそ六か月位との、ご教示を得た。
- (217) 前掲註(196)④中村論文、一八頁。
- (218) ①清水みき「外戚土師氏の地位―桓武朝の皇統意識に関わって―」(『平安京とその時代』思文閣出版、二〇〇九年)、四二頁。高野新笠の母、桓武の外祖母の土師氏一族は、河内・和泉・大和で行基の活動を支援するなど、一族の在地で仏教信仰に篤かったという。
②前掲註(193)②岩佐論文、四一～四二頁。願徳寺の近隣は土師氏が勢力をもっていた地域であり、長岡京北方の大枝に高野新笠の御陵も所在しているとされた。しかし、ここには有力な土師氏一族はおらず、御陵の存在も慣習にしたがって、宮の北方に営まれたにすぎず、土師氏一族の存在とは無縁とするのが、歴史研究者の大方の説である(清水前出書、三八～三九頁)。
土師氏について左の論文も参照した。
③松田誠一郎「大阪・道明寺十二面観音(伝試みの観音)について(上)・(下)」(『MUSEUM』四四八・四四九、ミュージアム出版、一九八八年)、(下)三〇～三二頁。
- (219) この項は、前掲註(118)②西本書を参照した。事件の原因に関しては諸説あるが、古い伝承を採り上げておきたい。
森田悌「早良親王と御霊」(『王朝政治と在地社会』吉川弘文館、二〇〇五年)、一一八頁。『水鏡』の伝承によれば、桓武天皇は行幸ばかりで世の政を早良親王にのみ預けていた。親王が佐伯伯今毛人を宰相(参議に任命したのを、佐伯氏が参議になる前例がないとして、藤原種継が反対したので天皇に種継排除を申し出た。天皇は不快に思つて親王から政を取り上げたので、不満に思い種継暗殺に至ったという。
- (220) 前掲註(192)②松田発表要旨。
- (221) 前掲註(193)②岩佐論文、四一～四二頁。

- (222) ①浅見龍介 図版解説「165 不空羼索観音菩薩立像」(東京国立博物館・福岡市博物館・大阪市立美術館編『菅原道真没後千百年 天神さまの美術』、二〇〇一年)。

早良親王所縁の地であるので、この地域の土師氏により怨霊消滅のため造像された可能性も考えられよう。

- ②西本昌弘「藤原種継事件の再検討―早良親王春宮坊と長岡京の造営―」『歴史科学』一六五、大阪歴史科学協議会、二〇〇一年、一〇頁。

上宮天満宮の東方五キロほどに、早良親王が淡路に流される途中、船より降りて辞世の詩を作った梶原寺がある(諸寺縁起集、醍醐寺本)「大安寺崇道天皇御院八嶋両処記文」、前掲註(127)藤田編書、一一七頁。梶原寺の所在する高槻丘陵は、奈良時代の官所用瓦の生産地で、長岡京の早良親王春宮坊関連地にも供給している。辞世の詩に「二三我弟子」とあることから、梶原寺に早良親王の弟子がいたことを示唆し、瓦生産に影響力があつたと推測されている。

- (223) 異国風の風貌・背面で条帛と天衣をX字状に交差させる・背面の髪際を後方へ反らす・石帯と花飾りが、本像に共通し、頂上仏が上半身を表すのは、道明寺蔵「十一面観音立像」と同様である。

長岡龍作「山形宝積院十一面観音像をめぐる」『美術史』一二二、便利堂、一九九八年)を参照した。

- (224) 前掲註(218)①清水書、四二頁。桓武天皇は、母方外戚の土師氏や父方祖母紀氏の氏寺には本像に近い最新の造像を認めていたとする。

- (225) 松田氏は、道明寺に「試みの観音」として伝えられる、もう一体の十一面観音立像は、神護景雲から宝亀年間(七六七―七八一)の頃に、白壁王の即位・山部親王の立太子を祈念し、また土師氏改姓を念願して土師氏一族により発願、造像された可能性を指摘している(前掲註218③松田論文、(下)三三頁)。

- (226) 十一面観音の怨を鎮める効験に関する経典は左の通りである。

- ①『仏説十一面観世音神呪経』耶舍崛多訳(『大正新修大蔵経』二〇、No. 1070.149b17)。

十種果報「四者能破一切怨敵」。

- ②『十一面神呪心経』玄奘訳(『大正新修大蔵経』二〇、No. 1071.152b20-21)。

宝菩提院願徳寺蔵「国宝 菩薩半跏像(伝如意輪観音)」と相似する白描図像について(下)

十種勝利「四者能伏怨敵而無所畏」。

- ③『陀羅尼集経』四、阿地瞿多訳(『大正新修大蔵経』一八、No. 0901.812c19)。

- ④『十一面観自在菩薩心密言念誦儀軌経』不空訳(『大正新修大蔵経』二〇、No. 1069.140a25)。

十種勝利「四者一切怨敵不能沮壞」。

- (227) 不空羼索観音には、左のように怨を消滅させる効験がある。

- ①『不空羼索神変真言経』菩提流志訳(『大正新修大蔵経』二〇、No. 1062.228c12-13)。

二十称嘆功德勝利「十四者不為一切惡人誹謗謀害。若有起者速自便滅」。

- ②『不空羼索呪経』闍那崛多訳(『大正新修大蔵経』二〇、No. 1093.40a8-9)。

二十種功德「十三者若有諸怨生於惡意。欲來讐対亦自消滅」。

- ③『不空羼索神呪心経』玄奘三蔵訳(『大正新修大蔵経』二〇、No. 1094.403a20)。

二十勝利「十四者設有怨讐速自消滅」。

- ④『不空羼索呪心経』菩提流志訳(『大正新修大蔵経』二〇、No. 1095.407a5-6)。

二十種殊勝利益「十四者不怖怨讐。十五者設有怨讐速疾和解」。

- (228) 前掲註(196)藤岡論文、四一頁。

- (229) 唐より来朝したと伝えられる伝説上の仏師・稽文会、稽主勲が想起される。

①岩佐光晴「仏師稽文会・稽主勲をめぐる」『日本美術史の杜 村重寧先生星山晋也先生古稀記念論文集』(竹林舎、二〇〇八年)、五七―五八頁。大安寺木彫群について両仏師の存在を想定してみると、新たな考察の可能性が開けてくるとされる。道慈の関与を指摘されている。製作後、帰国したと推定され、類作がない証とされる。本像もその可能性がある。

- ②奥健夫「仏工志斐公麻呂の一事績」(『仏教芸術』五、中央公論美術出版、二〇二〇年)、四〇頁。二人を八世紀後半ないし末頃の仏師と想定されている。

(令和三年十二月稿・令和五年一月改稿)

(徳川美術館 参与)

附記

本像について、中村恒克氏より貴重なご教示を賜りました。末筆ながら、記して感謝申し上げます。

訂正

前輯に間違いがありましたので、訂正させていただきます。

誤 一七頁。下段八行目 『週刊朝日百科 国宝の美』 一六・
正 一七頁。下段八行目 『週刊朝日百科 国宝の美』 一三・

金鯨叢書 第五十輯 [年一回刊行]

——史学美術史論文集——

令和五年三月三十日 編集
令和五年三月三十日 印刷・発行

編集者

〒171-0031

深井 雅海
徳川義崇

発行者

〒171-0031

東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
公益財団法人 徳川黎明会
電話(3950) 〇一一一番(代)

〒461-0023

東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川林政史研究所
電話(3950) 〇一一七番(代)

〒605-0089

名古屋市中区徳川町一〇一七
徳川美術館
電話(935) 六二六二番(代)

印刷所

京都市東山区元町三五五
株式会社 思文閣出版
電話(533) 六八六〇番(代)